

基本高水選定の論点

平成 18 年 5 月 27 日
委員 佐々木礼子

これまで委員会で繰り広げられた基本高水流量の検討に際し、気になるポイントを挙げると以下のようになる。

基本高水流量 4,000 は小さすぎるのではないか。

- ・棄却基準により粛々と棄却を進めた結果の 4,000 は、5,000 から 4,000 まで飛びすぎているように思える。

そこで、分布を考えると

- ・5,000 のパターンである伊勢湾台風は、これからの雨を考える上で大切なデータである。したがって、決してありえないとはいえない 5,000 という雨が上限にあることを意識する必要がある。言い換えると基本高水候補の俎上に上がる降雨群を分布として考えた場合、5,000 を分布上の上限ととらえる。そうすると、最小は 4,000 ということになる。
- ・つぎに直近の既往最大洪水である平成 16 年型は何も操作しなければ、わずか 12 mm で棄却はされるものの 1/100 で 4,900 である。
- ・直近の既往最大洪水である平成 16 年型を棄却基準に収まるように操作をすると 1/100 で 4,700、操作しない場合、1/60 でも 4,500 ある。
- ・4200 ~ 300 から 4800 ぐらいの値がもう少し棄却後に残ると予想していたが、たまたま 4,000 となってしまったのは残念である。

既往最大洪水流量と川・流域の特質を考える

- ・平成 16 年型降雨は既往最大洪水流量であり、とくに直近であることを忘れてはならない。今後の雨の傾向を秘めている。
- ・既往最大洪水流量と河川施設そのものの性質を総合的に判断すべきである。これからの雨はどのような雨になるのか。また、武庫川流域の性質からどんな雨が怖いのか。最も雨が降りやすく、雨量が多い地域は、六甲有馬から名塩にかけてである。いずれも大規模宅地開発が進んだゾーンであり、とくに有馬川流域は風化した花崗岩の地質をもち、大雨と共に土砂が流出しやすい。また、有馬川は支川で最も流量の大きい川である。これらの地域にシャープな雨が降ると危険である。平成 16 年型の雨はこれらのことを非常によく表現できている雨のパターンである。
- ・そういう観点からすると、昭和 37 年の雨のパターンでよいのかという疑問が湧いてくる。

現行の 4,800 とのすりあわせの問題

- ・現行の 4,800 とはどのようにすり合わせるのか。河川横断構造物の問題等